子どもの健康と環境に関する全国調査（エコチル調査）
論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル：

Paternal childcare at 6 months and risk of maternal psychological distress at 1 year after delivery: The Japan Environment and Children's Study (JECS)

和文タイトル：

父親の育児行動と母親の心理的苦痛の低減との関連：子どもの健康と環境に関する全国調査（エコチル調査）より

ユニットセンター（UC）等名： 富山ユニットセンター

サブユニットセンター（SUC）名：

発表雑誌名： European Psychiatry

年： 2021　　DOI： 10.1192/j.eurpsy.2021.2213

筆頭著者名： 笠松　春花

所属 UC 名： 富山ユニットセンター

目的：

先行研究では、父親の育児参加は母親のメンタルヘルスに良い影響をもたらすことが報告されているが、父親のどのような育児行動が効果的であるかは明らかになっていない。本研究ではエコチル調査のデータを用いて、子どもが生後 6 カ月時点の父親の育児行動の頻度と、子どもが 1 歳時点の母親の心理的苦痛との関連を調べた。

方法：

エコチル調査参加者のうち 75,607 組の両親のデータを用いた。母親の回答に基づき、子どもが生後 6 か月時点の父親の育児行動(「中遊び」「外遊び」「食事介助」「おむつ替え」「着替え」「入浴」「寝かしつけ」)の頻度を 4 段階で評価した。また、子どもが 1 歳時点の母親の心理的苦痛は K6 を用いて評価し(点数が高いほど苦痛度が高い。中等度：5-12 点、重度：13 点以上)、多項ロジスティック回帰分析を用いた。

結果：

「中遊び」「外遊び」「おむつ替え」「入浴」は 70%以上、「食事」と「着替え」は 60-70%、「寝かしつけ」は 45.9%の父親が「いつも」または「時々」行っていた。7 種類の育児行動全てにおいて、父親が全くしない群と比べ、頻度が高い群では、母親の中等度の心理的苦痛および重度の心理的苦痛いずれにおいてもオッズ比低下を示した。(オッズ比とは、ある疾患の生じやすさを他の群との比で表した値である)

考察（研究の限界を含める）：

子どもが生後 6 か月時点で父親の育児行動の頻度が高いことと、子どもが 1 歳時点の母親の中等度または重度の心理的苦痛の低減と関連があった。本研究では父親の具体的な育児行動として 7 種類の行動に着目し、いずれも一定以上の頻度で父親が参加していることを確認した。また、「食事介助」「おむつ替え」等の生活の介助行動のみならず、子どもと遊ぶことでも母親の心理的苦痛の低減と関連することがわかった。本研究の限界としては、育児行動の評価が母親によるものであり、母親の視点に基づくバイアスを考慮する必要があること、より重篤な心理的苦痛を抱えている母親が調査から脱落している可能性があること等が挙げられる。

結論：

父親が積極的に育児に取り組むと、母親の心理的苦痛を低減させる可能性が示唆された。本研究は観察研究であるため、父親の育児参加が母親の心理的苦痛に対して良い影響をもたらすかは、実際には検証できていない。今後、父親の育児行動を促進する教育等の介入研究を行う等の、さらなる検証が必要である。